

ただいまのあとはがらがらちんちん

ふらふらと自宅へ帰る道すがら。

別に酔っているわけではなしに。

ただ、生きることが精一杯過ぎて、ふわふわしている、ただそれだけの足取り。

ふわんふわん。

雲の上を歩いているかのような。

いつそこが抜けるやも知れぬ、ふわりふわり。

そんなこんなで、単純な帰宅の途も、一仕事と相成っている。

いやんばかん。

阿呆の喚き。

阿呆の嘆き。

日曜の真昼間っから、そんな愚にも付かない一人遊びを繰り広げる。

行きつけの喫茶店（カフェなんて洒落たものではなく、いわゆる一つの喫茶店。頑固オヤジがなべ振るうみみたいな）で、昼飯にしょうが焼き定食をかつ食らい、ちょっと小粋にこーふいーを啜り、たばっこーを燻らせ、可愛らしい店員さんをちら見しながら、ふむふむいかにもそうであるとか何とかのたまいながら。

その帰り道がふわりんふわりんしているのである。

で、こちとら一般庶民。

住宅も一般住宅街。

飯にあり付いたかの地からは、あんよで10分ほど。

当然、行きがかり上多数の住宅の眼前を歩きぬけるわけ。

するってえと、歩く先から先から、

『てやんでえ』

だの

『黙りくさせ〜』

だの

『この唐変木が』

だの、やたらと怒号が飛び交っているのである。

はて、こりゃ世界の終わりか、それともハードボイルドワンダーランドか、などと、村上春樹を気取って、聞きたくもない種々雑多の怒声がBGMとなり帰路を行く羽目になる。

そこで小生、

『ははあん、さては、さてはだ、ふむふむ、分かった、御意御意』

と腑に落ちる。

するってえとこういう理屈だ。

①世間はお盆である

②となると、いわゆる家同士の付き合いが否応なく発生

③旦那方の父母が邸宅に来襲

④義父義母にやたら滅多ら気を遣う

⑤精神の磨耗、果ては崩壊が迫る

⑥ようやく盆も明けるってえことで、義父母帰還

- ⑥妻精神を錯乱している
- ⑦娘息子が夏休みを謳歌して自室で乱痴気騒ぎ
- ⑧妻堪忍袋の緒が切れる
- ⑨怒声怒号叫喚、そして未曾有の大作殺界の誕生

てな算段。

どうでい、いっちょ名探偵事務所を起こしたろかしらん。きらりん。

こりゃ、完璧な推理だ。

よかよか、よか気分。

ふわらふわらと自宅に戻る。

けえったぞ、べらんめえ！

そう息巻くも、我が家に小生一人住まい。

ただいまを言う相手もない。

怒号交わす相手もない。

食事も外食。

マンションの共有廊下にはカレイライスのかっほーりがプーンポン。

イチバン虚しいのは小生。

ははは。

笑い声も虚しくこだま。

あえなく頓死。

手相占い

この暑い盛りに、仕事の打合せを兼ねた食事だってんで、のこのこと大都会新宿、コンクリートジャングルしんぢゆく、眠らない街シンヅク、眠らない芸人明石家さんま、は関係なく、件の街へ足を踏み入れる運びとなった。

そこからしてまあ気分は乗ってなかったんだけども。

何せこの暑いさなか、熱のこもりまくる街へ来いと言うのである。

気分が乗るきゃつの方がおかしいってもんである。

加えて時間は午後7時近く。

早くも帰宅の途につくスワラリーマンやオフィースレディーたちでごった返し、目的のはっきりしない学生風情の団体、おのぼりさん、数多ある身分職業のその殆どが集まっているような状況である。

小生これでも東京に根を張って約10年、都会にも慣れてきたって言い張りたいのは山々ではあるのだが、やはりそこは田舎モノ。

人に酔ってしまうのである。

歩きたい方向に歩けないのである。

『するってえと何かい、田舎モンは都会を歩くんぢゃねえってことかい！』

べらんめえ！

好きにさせろい！

と言わんばかりに往来の中心を闊歩して、自分の存在を示して見せ付ける。

誰に？

いや、そればっかしは小生に聞かれても不明ではある。

誰にも分からないのである。とにかく慣れないことをして見せていたところ、ひよろろっとそ知らぬ顔をして見ず知らずの男がにじり寄ってくるのであった。

その見ず知らずの男曰く、

「そちの顔には凶相が出ておる。直ちに占ってその悪命から逃れ得る術を伝授して進ぜよう」

と言うことらしいのである。

前述どおり、小生は田舎モノ。

『悪いことがあるが、助かる道を俺なら教えられるんだけどなあ』

みたいなことを言われてしまえば、そりゃあ

『おうおう、是非に是非に～。あな、お代官様～』

ちょこちょこついていくのが人情ってもんである。

がしかし！がしかし！！

既にその手に乗って、痛い目にあったことがあるのである！

すなわち、免疫が出来上がっているのである！

抗体が完成しているのである！

さすれば付いていくわっきゃあないんで。

「それはたしかに悪い知らせ。しかもそれを除去してくれると言うのであれば、それはまさに渡りに舟ではござらんか。ただ、いかんせん、そなたと小生には、今まで何ら関係性がなかったわけで、そんな間柄の人間から進言されたとして、『あはそりゃラッキィベイビィいっちょ教えてくれんかしらん☆』などについていくとお思いでらっしゃるか？それは、リーむーリーむー、のん

のん」

と一刀両断にしてやったのである。

ばっさりである。

ぎったんぎったんのぼんろぼんろのちよっぺらびれらんと。

「いやはや、これで小生もいっぱしの都会人～☆」

などと悦に入りながらも、

「でも、実わちょっと不安・・・だって田舎モノだもん。ぐすん。涙」

と、小心者が顔を覗かせる。

やきもきするならいっそのこと、と逡巡したものの、一度切り払った男の下へすごすごと顔を出すのは、さすがの田舎モノとて気が引ける。

ってんで、一計。

本屋へGO。

数ある占い本の中から、『人相占い』なる書物を手に取り拝受。

ふむふむ、なになに、そんでそんで、どっこいそれで、であるからどした、なんとすれば。

読み終えた結果、最悪の凶相。

自分で占い自滅。

結局頓死。

酒に溺れて虚し。

人に酔う

過去にも申したが、小生田舎モノであり、東京の街を練り歩くのは得意ではない。

なにしろ思い通りに歩けない日々が、かれこれ10年続いているのである。

憤りと羞恥がみっくしゅじゅーちゅになって体内を駆け巡るのである。

「こんなんでは、都会人気取ってザギンやギロツポンを闊歩豪遊できやしねえ」ってんで、無理して往来を悠然と歩いてみるのがちよくちよくあるのである。

と豪語はしているものの、大抵は規模の小さな街を厳選に厳選を重ね選び抜き、かつなるべく人通りの少なそうな午前中なんか狙いを定めて、

「よっしゃ、どれどれ一つ揉んだるか」などと、強がっちゃり発言をしながらいざ乗り込むのである。

余談雑談ではあるが、小生夜も苦手なので、基本的には、えいえむ、つまり午前に焦点を絞るのである。

花の都東京の夜などと言ったら、あらゆる種類の欲望がマーブルチョコレイトになっているような街。

あっちはオナゴがいやんばかん、こっちはメンズがへい彼女お、そっちはフォーリナアがハイボォイ、どっちに行けば健全な雰囲気にもまれて、健やかなる時を送れるか分かったもんじゃない。

。

田舎モノには厳しい街である、つくづく。

というわけで、お天道様がテッペンに来る前の、ひなびた下町なんぞを練り歩くのである。

「へいへいおいらはみやこびと。とかいのくうきがだいすっき」

などと創作歌謡を口ずさみながら、駅から一步下界に降臨。

とうころぐわ、ところが、下町の野郎め、通りが人でごった返してやがらう。

「なんでそないなこっつおこつんだべか」

突如ノ出来事ニ思ワズイナカ言葉ガ出テシマッタ。

事実は至極単純。

頭上に目をやると、街灯の横っちょに

『隅田川花火大会』

と、でかでかてかてかぴかぴか書かれちゃった。

はははは。

乾いた笑いが虚しくこだま。

当然数多の人に色んな角度からあらゆる力で、ぶつかられ。

ぶつかり。

ぶつかられ。

かられ。

れり。

られん。

結局頓死。

花火は無視。

酒に逃げて虚し。

毛筆と冷やし中華

「さ、文章書くべ。筆さ執ってみんべ」

はた、と手が止まる。

はた、と。

筆を執ると言いながら、小生結局はキィボォドはパチクリパチクリするだけ。

味気なし。

パチクリパチクリ、えんたーしふとえんたーすぺーす。

水気なし。

こんなんじゃあ、人生の枯渇は必死。

そんなこつ、あつたらはんかくせべ。

『打開策は、いっこしかねえべ』

ってんで、毛筆屋へ競歩で向かう。

おいっちにおいっちに、えっちらおっちらどっこいせ。

まあ、分かっちゃいたが行き当たりばったりで毛筆屋なんてありやせん。

分かっちゃいたんだ。

そんぐらいのこつ、おらだって分かってたべさ。

分かってたけんども、やっぱりさみすい。

この寂しさは、お食事で、満腹感で、満たされた感で、紛らわせるしかない。

『おろ？こげなところに、定食屋さんがあったべさ』

ラキラッキー、近こう寄ってみる。

『なにになに？おやまあ、風鈴の絵が書かれて涼しげな貼り紙だべや』

さらに近こうよ寄ってみる。

『なんと、冷やし中華はずめますたってかい？』

ラキラッキー、と読んだあとにふと隣の貼り紙にも目を移す。

『なにになに、おやまあ、真っ白でシンプルな貼り紙だべや』

さらに近こう寄ってみる。

『当店は7月末日で閉店いたしました』

はははははははははははは。

当初の目的も、食事も叶わぬボンクラ。

パソコンの前で、いつもどおりキィボォドさパチクリパチクリやって、

結局頓死。